

日本古代農業土木の歩み

— 日本書紀, 続日本紀, 日本後紀の記述から紐解く —

History of Ancient Agricultural Engineering (Nougyodoboku)

— Unraveling from the descriptions in the Nihon shoki, Shoku nihongi, and Nihon koki —

○田中義人¹, 溝口勝¹

Yoshito TANAKA¹, Masaru MIZOGUCHI¹

1. はじめに

現在土木史研究において古代・中世の占める割合は低い。土木史研究は近世以降が全体の90%を占めており、古代・中世は全体の10%に過ぎない。(西山ら, 2012) つまり土木史研究において古代・中世に関する研究は手薄になっている現状である。

他方で「古代農業土木は国家機構そのもの(農業農村工学会, 2010)」であると指摘からもわかるように、農業土木の実施は権力主体と切っても切れない関係性にある。つまり農業土木の実施には権力主体が存在したのではないかということである。これらの古代の権力主体の存在は歴史を研究する上でも重要なポイントである。

こうした理由から筆者らは古代農業土木の歴史を研究することは古代の権力主体の存在を確かめることを内包しており、日本のこれまでの歴史を知る上でも重要な切り口となると考えた。

そのため本研究では、六国史文献調査をもとに平安時代以前の農業土木の実施状況について明らかにするとともに農業土木史の観点から歴史分析が可能かどうか検討した。

2. 研究方法

平安時代以前に書かれた六国史全 83 巻の文献調査を行った。具体的には、日本書紀 40 巻、続日本紀 30 巻、日本後紀 13 巻についてである。日本後紀が 13 巻までの理由は平安時代に移り変わる時期にあたる桓武天皇までの巻数を調査したためである。

漢文の原文と現代語訳本を入手し、農業土木に関連するキーワードを抽出し、記述件数を調

査した。全てのキーワードを抜き出すためには 68 ページのノート を 3 冊必要とした。

抜き出したノートのデータをもとに、農業土木の表とその他の農業関連事項の記述を含む現代語訳と原文の対訳表を作成した。その後、表をデータベース用の CSV 形式に変換し、「六国史の中の農業土木に関する記述検索システム」としてインターネット上に公開した。(https://www.ia.iga.a.u-tokyo.ac.jp/y_tanaka/search/tanaka.html) これらは農業土木史の観点から歴史分析が可能かどうかを検討するために行った。

3. 結果と考察

六国史の中における平安時代以前の農業土木および農業に関連するキーワードの記述件数を調査し、結果を表に示した。(Table 1) 平安時代以前の農業土木事業の記述件数は溝 18 件、池 53 件、堤 29 件の合計 100 件であった。表の縦軸は農業土木および農業に関連するキーワード、横軸は天皇代、天皇・皇后名、時期・時代を示している。最上段は天皇別のキーワード合計を示しており、一番右の列は全天皇のキーワード別合計を示している。

結果を踏まえて農業土木史の観点から古墳、用排水の分離の可能性、天皇家の河内国進出などについて考察した。

(1) 古代農業土木事業と古墳

本研究から古墳時代の中期から後期にかけて溝工事の実施記述が一つも存在しないことがわかった。古墳の周濠(古墳のまわりの堀)をため池として利用するためには各圃場に水を引くための溝の建設が必要となる。ところが古墳時

¹ 東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate School of Agricultural and Life Science, The University of Tokyo
キーワード: 古代農業土木、農業土木史、六国史、人文情報学 (デジタル・ヒューマニティーズ)

